

東京2025デフリンピック

～未来につながる大会に、誰もが個性を活かして活躍できる共生社会の実現のために～



TOKYO 2025
25TH SUMMER DEAFLYMPICS

一般財団法人全日本ろうあ連盟
2025年10月20日

デフリンピック

- 国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)が主催し、夏季と冬季それぞれ4年毎に開催されるデフアスリートの国際総合スポーツ競技大会
- 第1回夏季デフリンピックは、1924年にフランスのパリで開催
- 「デフリンピック」の名称は、2001年に国際オリンピック委員会(IOC)が承認
- 競技は**一般の競技ルールに準拠**するが、競技場に入った時点から、補聴器等の使用は禁止されることや、競技運営に国際手話のほか、スタートランプや旗などを利用した**視覚による情報保障を用いる**ことが特徴

デフリンピックの理念



デフリンピックの創始者 ウジェーヌ・ルーベンスーアルケ 氏(1884 - 1963)

- ◎ 本業は自動車整備士であり、デフアスリート(自転車競技)
- ◎ フランスろう者スポーツ連盟、国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)の創始者

ウジェーヌ・ルーベンスーアルケ 氏の夢

- ◎ デフリンピックの提唱のきっかけは？
- ◎ ろう者の社会的地位向上、手話言語の認知や普及、社会変革を！

デフリンピックの特徴

参加対象となる選手の特徴

○ 補聴器等をはずした裸耳状態での聴力損失が55デジベルを超えており、各国のろうスポーツ協会に登録していること。

競技及び視覚的情報保障

○ 基本的にオリンピックと同じルールで運営され、主に国際手話によるコミュニケーションや情報全てが視覚的に保障された競技環境。

○ 選手全てが平等にきこえない立場でプレーするという公平性の観点により、競技・練習では補聴器等を使用することは禁止される。



サッカー競技では、主審は笛の代わりに旗を振ります



陸上競技や水泳競技では、スタートの音をフラッシュランプで知らせます



バスケットボール競技では、審判員の笛をゴールポスト枠のランプやコート4隅のランプで知らせます

デフアスリートが抱えるハンディキャップ

きこえないことは、“みえない障害”といわれています

きこえない人は、見た目からはきこえないことが分かりません。

しかし、スポーツをするうえで、きこえる人に比べて不利な点があることが、研究の結果からも明らかになっています。

不利な点は、主に以下の2つです。

①バランスがとりにくいこと

・・・耳には「体のバランスをとる」という大切な役目がある

②情報の量が少なくなること

・・・例えば、きこえる人はチームメイトに「パスするよ」「こっちにパスをちょうだい」など、声でコミュニケーションをとって次の動きをとる。

ところが、きこえないと、チームメイトと常にアイコンタクトをしたり、ハンドサイン等でのコミュニケーションが必要となる。

また、スポーツは「目」で見る以上に、「音」が重要。

風の音や打球音、ラケットなどスポーツ用具の音など、音は勝つためにとても重要なものなのです。



空手競技ではランプを設置

東京2025デフリンピックの大会概要

期間

2025年11月15日～26日(12日間)

開会式：11月15日 閉会式：11月26日

参加国

70～80か国・地域

参加者数

各国選手団等：約6,000人

(選手約3,000人、ICSD役員・SD・審判・スタッフ約3,000人)

大会会場、施設

競技会場、開閉会式会場(東京体育館)、

練習会場、デフリンピックスクエア等

競技数

21競技

(陸上競技、バドミントン、バスケットボール、ビーチバレーボール、ボウリング、自転車競技(ロード)、サッカー、ゴルフ、ハンドボール、柔道、空手、自転車競技(マウンテンバイク)、オリエンテーリング、射撃、水泳、卓球、テコンドー、テニス、バレーボール、レスリング(フリースタイル)、レスリング(グレコローマン))

大会ビジョンの実現に向けて

1 デフスポーツの魅力や価値を伝え、人々や社会とつなぐ

- ・デフアスリートを主役に、最高のパフォーマンスを発揮できるよう大会準備を進め、その姿を通じて、本来、スポーツが持っている素晴らしさとともに、**デフリンピックやデフスポーツの魅力や価値を発信し、普及・啓発**に努める。
- ・また、あらゆる人が協働した大会運営や**子どもたちの参画**など、多様な視点を大切にした大会運営をめざす。

2 世界に、そして未来につながる大会へ

- ・大会を通じた手話言語の理解・普及・拡大など従来からの情報保障の推進・強化に加え、**デジタル技術を活用した、新しいコミュニケーションツール等の開発、社会への普及**を促進する。
- ・このような取組を通して、**国籍や障害のあるなしに関わらず、誰もが心を通わせることのできる街**・東京の魅力を感じてもらい、**世界との絆**を深めていく。

3 “誰もが個性を活かし力を発揮できる”共生社会の実現

- ・大会開催を機に、デフリンピック・ムーブメントとして、**デフスポーツやろう者の文化への理解を促進し、障害のある人となない人とのコミュニケーションや心・情報・街のバリアフリー**をさらに推進する。
- ・このムーブメントを通して、互いの違いを認め、尊重しあい、**誰もが個性を活かし力を発揮できる共生社会づくりに貢献**する。

日本開催の意義

東京2025デフリンピックが目指すもの（レガシー）

“誰ひとり取り残さない世界へ” 心・言語・コミュニケーションや情報のバリアをなくし、
障害のある人もない人も心豊かに暮らせる共生社会の実現を

単なる国際スポーツ大会の域を超え、きこえないことや手話言語の理解を広め、共生社会の実現を目指す

- ➡ ・ 全日本ろうあ連盟と東京都(主にきこえる人々)が連携して運営するという新しいあり方を導入
- ・ 海外からきこえない審判員を募り、日本のきこえる審判員とともに競技に関わってもらう
- ・ ボランティアもスタッフも、手話言語ができる人とできない人がともに活動し、大会そのものを「誰もが個性を活かして活躍できる場」とする。
- ・ デフスポーツやデフリンピックの認知度向上で、きこえない子どもたちに夢を与える。



最後に



11月15日から26日の間、世界各国からきこえない選手やスタッフ、観客等、約6000人が日本へ来られます

これは日本で初めてのことです

この機会がこれからまたあるかどうか

ぜひ、皆様もデフリンピックスクエアや競技会場に足を運んでいただき、実感してほしいのです

未来のために、国籍や障害のあるなしに関わらず、誰もが心を通わせることのできる社会を考えるきっかけとなればうれしく思います